

一七世紀北インドにおけるアイの生産と流通

——バヤーナ地方を中心として——

長 島 弘

【要約】 インドのアイは、一七世紀前半に毛織物の染料としてさかんにヨーロッパに輸出されたまことに世界的な重要性を持つ商品であったが、従来の諸研究では、その生産と流通の諸条件の解明が不十分である。そこで本稿では、最優秀アイの産地たるバヤーナ地方について、(一) 諸生産町村の地図上の位置の比定とその歴史地理的位置の確認、(二) 生産の自然的立地条件の検討と他の産地や一九世紀のイギリス人によるアイ・プランテーションとの生産過程の比較、(三) 経営形態の分析、(四) 市場構造の分析を行なった。そして、バヤーナ地方が当時の大街道沿いにあったこと、その生産過程は当時として最も労働集約的で、かつある程度の資金を必要としたこと、生産農民の中には富裕なものも出現し得たこと、同地方のアイ産業には、それぞれ市場町を中心とする五つの市場圏があり、各市場圏は郡の境域を越えて拡大していたが、それぞれの中心は郡の中心でもあったこと、またバヤーナ地方といえどもやはりアイより穀物生産の占める比率の方が大きかったであろうこと、などを強調した。

史林 六三巻四号 一九八〇年七月

はじめに

アイは、インディオの名で知られるように古来インドの特産品であった。マルコ・ポーロや一五、一六世紀の諸記録にもインドのアイについての言及がみられる。そして、ポルトガルによって直接ヨーロッパに輸出されるようになり、ポルトガル王室の独占商品ともなった。

しかし、インドのアイがヨーロッパ人によって最も注目されるようになったのは、一六世紀末に毛織物の染料として大青にとつてかわつてからで、一七世紀の前半には、オランダ・イギリス両東インド会社によって盛んに輸出された。その意味で、インドのアイはまさに世界史的重要性を有した商品であった。

ところで、このアイは当時インドのさまざまな地域で栽培されたが、特に北インド西部のグジャラート地方のアフマダーバード市の北西一〇kmのサルケージ (Sardhe) 村周辺や、一時ムガル帝国の都であったアーグラ市の北九〇kmのコイル (Koil) 今日のフリーガル) や一五〇kmのクルジャ (Khujia) の周辺、そして就中、アーグラ市の南西八〇kmのバヤーナ (Bāyāna, Biana) 周辺に産するものが品質優秀であり、好んで海外へ輸出された。コイル、クルジャ、バヤーナのアイは、以前からアルメニア商人や外来のムスリム商人によって主に陸路イランからアレppo方面に輸出され、その一部分、特にバヤーナのアイはさらにヨーロッパへも渡っていたが、ヨーロッパ人の進出後は海港に近いサルケージ周辺のアイが、バヤーナのそれとともに海路ヨーロッパやイラン、イラク方面へ輸出されることが多くなった。そして蘭英両東インド会社はサルケージやバヤーナのアイの最大の買付け商人となつたのである。

従つて、サルケージやバヤーナのアイについては当時の史料も多く、研究も多い。特に注目すべきものとして、W・H・モアランド、松井透、I・ハビープ、J・N・サルカール、H・K・ナクヴィ等の研究がある^①。そして、それらにおいて、アイの貿易量、生産量、アイ価格の変動、アイ生産と国家権力との関係、生産過程と経営形態などの諸側面に渡つて理解が深められてきている。

しかし、以上の諸研究は、いまだアイ生産を当時の諸産地の生産のための諸条件との関係の中で理解するという点で十分でないとは私は考える。従つて、本稿では、最も優秀なアイの産地とされるバヤーナ地方を例にとつて、以下の検討を行なうたい。

(一) 生産地帯の地理的位置の確認。

(二) 生産の自然的立地条件の検討と、他の産地や一九世紀のイギリス人によるアイ・プランテーションとの生産過程の比較。

(三) 経営形態の分析。

(四) 市場構造の検討。

ここで、本稿において最も依拠する史料について紹介しておきたい。それは、フランシスコ・ペルサールトの『報告書 (Remonstrantie)』である。ペルサールトは、一六二一年初頭から一六二七年末までアングラのオランダ東インド会社の商館に勤務した。そして、この間の彼の才能と努力により、この地域でのオランダのイギリスに対する優位は決定的なものとなったという。彼はアングラ地域で話される言語を理解し、バヤーナ周辺のアイ作地帯を定期的に訪問している。『報告書』は一六二六年に書かれた会社への商業報告で、バヤーナ周辺のアイ生産に関しては現存の最も詳細な史料である。なお、本稿は同時代の一写本をモアランドとP・ガイルが英訳したものに依拠している^②。

- ① W. H. Moreland, *From Akbar to Aurangzeb*, London, 1923, First Indian Edition, New Delhi, 1972, pp. 107-118, 159-164, *passim*.
 松井透「一九世紀インドのアイ産技術について」『青山経済論集』第一〇巻、一、二合併号、一九五八年、六三―九〇頁。以下、本論文を第一論文と略記する。同「一七世紀インドのマイ産と政治権力——イギリス東インド会社史料の一検討——」『南方史研究』1、一九五九年、三七―五五頁。以下、第二論文と略記。I. Habib, *Agrarian System of Mughal India (1556-1707)*, London, 1963, pp. 42-44.

- 59, 72-89, *passim*. (以下『Agrarian System』と略記) Jagdish Narayan Sarkar, *Studies in Economic Life in Mughal India*, New Delhi, 1975, pp. 128-203. H. M. Naqvi, *Urban Centers and Industries in Upper India (1556-1803)*, Bombay, 1968, pp. 54-62.
 ② Francisco Pelsaert, 'Remonstrantie,' c. 1626, tr. W. H. Moreland and P. Geyl, *Jahangir's India*, Cambridge, 1925, Indian Edition, Delhi, 1972. (以下 Pelsaert と略記)

一 生産地域

バヤーナ周辺におけるアイ生産の諸条件と市場構造を十分に理解するためにも、また論の展開のための便宜上からも、

まず同地方におけるアイ生産町村の地理上の位置を確認しておこう。この点についてはいまだ十分な研究が行なれておらず、若干の誤解もみられるのであえて検討するだけの意義があると考える。

幸い、ペルサルトルが五六村という、多くの村名をあげて、それらを五つの中心的な市場町と思われる地名のもとに五分類している^①。そこで、次の諸資料を参考にして、それらの地名と地図上の位置を確認して、その結果を表1および地図Iにまとめてみた。

(一) 一九〇〇年代初頭に書かれた『東部ラージプターナ地誌』——これには多くの地誌的情報と村名一覧表があるが、詳細な地図はない。^②

(二) 一九一六年～二四年の調査にもとづく二十五万分の一地方図と十二万五千分の一地方図——これには主な村名しか記載されていない。^③

(三) 一九六一年センサスのラージヤスターン州『センサス・アトラス』——これには全村の境域を示した地図があるが、概略図にすぎず村々の位置関係がやや不正確である。^④

地図Iでは、(二)に無い村々については(三)を参照して、そのおおよその位置を示した。以上によっても比定できない地名も若干残ったが、当時の記録としては比較的よく確認できた方だと言えよう。このことはペルサルトルの記述の正確さを裏づけると同時に、各村の歴史の長さを感じさせるものでもある。

バヤーナ地方は、当時ムガル帝国アーングラー州の西端に所属していたが、その大部分は一八世紀中にジャート勢力の樹立したバーラトプル王国の所屬となり、現在はラージヤスターン州バーラトプル県(District)の諸郡(Tehsil)に所属している。残りは西隣のアルワル、サワイ・マドプル両県と東隣のウツタル・プラデシ州アーングラー県に所属している。

まず、ペルサルトルあるいはむしろ彼の写字生の誤りを二、三指摘しておこう。彼は、カーヌアをバヤーナの西一〇コス(一コスは約二マイル＝三・二km)としているが、モアランドの示唆する如く、東一〇コスの誤りである。^⑤また、東一〇コ

II. Ghanowa (Bayana の西 10 kos)		Khānna	Khanwa	Khanwa
27	Mahal		Mahal	Mahal
28	Roubas	Rupbās	Rupbas	Rupbas
29	Tsertsonda	Sarsondā		
30	Dāber	Dābar		
31	Mahalpoer		Mahalpur Kachi	Mahalpur Kachi
32	Gorassa	Khorasa	Khorasa	Khudasa
33	Danagam	Dāhina	Dahanagaan	Dahinggaon
34	Bockolie		Bokoli	Bokoli
35	Barrawa	Barwār	Barwar	Barwar
36	Ordela	Udīl Jat	Aundel Jat	Odel jat
37	Ziasewolie			
38	Phetapoer	Fatehpur Sikri		
III. Bassoower (Bayana の東 10 kos)		Bhasāwar	Bhusawar	Bhusawar
39	Weyer	Wer	Weir	Weir
40	Ratsouipoer		Hasonwanda	Raseolpur
41	Hissonla	Harsaunda	Sirs	Hinsawada
42	Tserres	Siras	Barolie	Siras
43	Borolie		Jhalatola	Barauli
44	Ziarathara		Pathena (?)	Jhalatola
45	Pantla	Pathena (?)	Pathena (?)	Pathena (?)
46	T'zetzolie		Chantoli (?)	Chainoli (?)
47	T'sonohar	Sonkher		Sonhar
48	T'sonkeri	Sonkhri		Sonkhari
IV. Hindaun (Bayana から 10 kos)		Hindaun		Hindaun
49	Khera	Khera		Khera
50	Ziamalpooer	Jamālpur		Jamālpur

51	Kottipoer	2	Qutbpur	Krunkpur
52	Paricaneipoer	3		
53	Osierpoer	6	Wazirpur	Vazeerpur
54	T'serroot	5	Suroth	Suroth
55	Silttoali	6		
56	Nardoulie	6		
V. Tora (Bayana から 18 kos)			Toda Bhim	Todabhim
	教ヶ村			

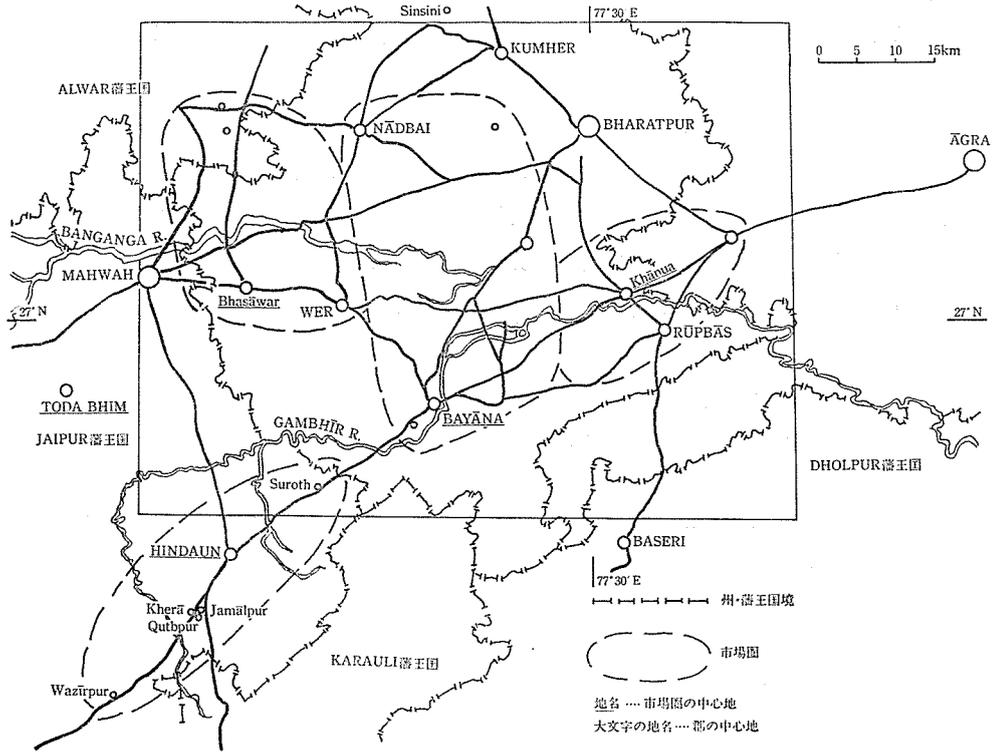
① P. 14. ② pp. 119~168. ③ pp. 114-159.

スとされた Bassouwer を、モアランドは東二〇マイルのバセリ (Baseri) かもしれない、とし、サルカールもその比定を踏襲しているが、これも東ではなく西一〇コスのバサーワルとすべきである。なお、ペルサルトルより約一〇〇年前に、バーブルが、トダ・ビムからソンカルを経てバサーワル付近へ進み、バヤーナを訪問後スィークリ (後のファテプル) を経てアーグラに帰還している。④ 以上からもバサーワルはバヤーナの西方にあり、バセリではありえないことがわかる。

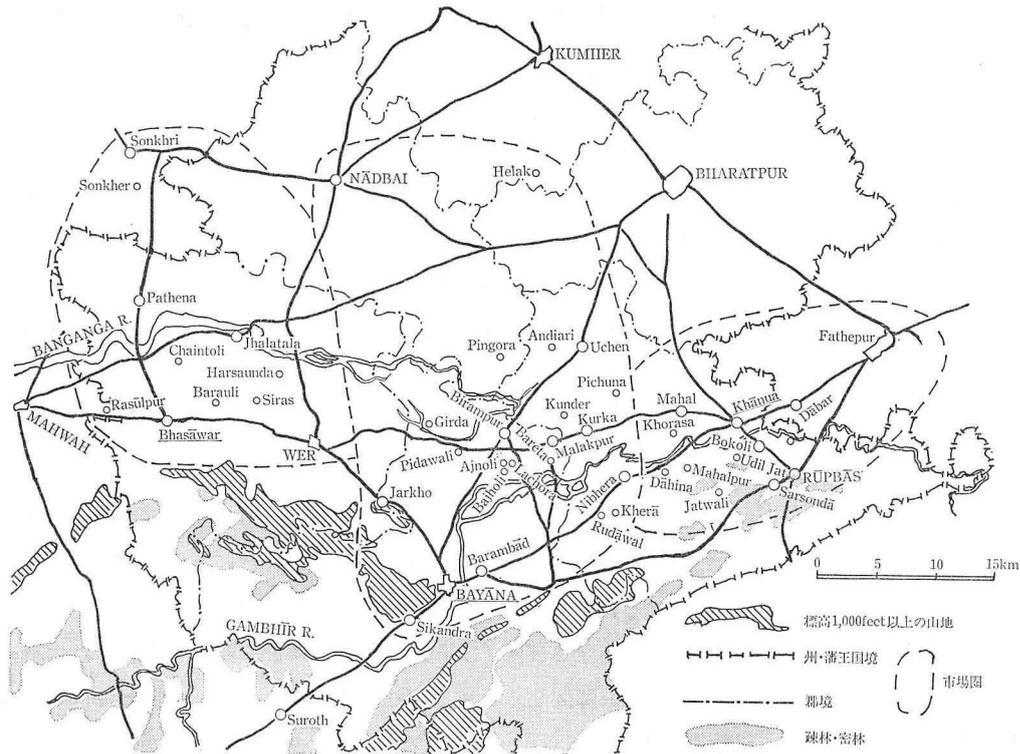
ペルサルトルが各村について記している距離は、モアランドの示唆のごとく、中心の市場町からの距離である。ただし、当時の交通網が不明なためそれらがどの程度正確かはいえないが、大体の位置の推定には役立つ。しかし、バヤーナーニベラ間七コスは実際には五・五コス程であり、バヤーナーナードバイ間一〇コスは実際は直線距離でも三六km (一一コス) あるなど、誤記がみられる。また、かなりの例から推して、彼の用いるコスは二マイルではなく、二・五マイルに近かったことも考えられる。

次に、ペルサルトルの記すバヤーナ地方のアイ生産地について、当時の他の史料がどれだけ裏づけているか見てみよう。まず、彼に次いで詳しく、時には彼より生々とした記録を残しているのが、英東インド会社のアーグラ商館員 W・フィンチである。彼の述べるところを若干紹介してみたい。

地図 I (1)



地図 I (2) (地図 I (1) の枠内部分拡大図)



(注) 地図 I (1), (2) 共, 地名表記法, 道路 (車の通れるもの), 州・藩王国境, 郡境等は 125,000 分の 1, 250,000 分の 1 地方図に従っている。

彼は一六一〇年十一月一日、バヤーナへアイの買付けのために派遣された。その晩はメンハプル (Munhapoor) アーグラからセコス。Mundāpura に比定されている) の大きなキャラヴァンサライに宿泊。翌日ファテプル (Fetipore セコス) を経てカーヌア (Cannawa 四コス) 泊。ファテプルはアクバルが建設後まもなく放棄した都城の跡のあるところだが、彼は、その跡の荒廃した様について述べた後、「その(市内の)土地の多くは園地 (Garden) に変えられ、多くはアイや他の穀物が植えられている。従って、そこに立った人は自分が都市の真ん中にいるとはほとんど思わないだろう」と述べている。又、カーヌアについて、「小さな田舎町であり、その周囲で大変良いアイが生産される」「年間五〇〇マウンド生産する」と述べている。それから彼は当時の主街道(後述)をそれてウッチェン (Ouchen セコス) へ行き十一月二日まで滞在した。その間アイの買付けに従事していたに違いない。彼は「ウッチェンは大変立派に見える。バヤーナ以外のどの町もこれに比すべくもない」と述べている。これを見ると、ペルサールトが一樣に村としていたものの中にも、フィンチの目からみれば町とされるもののがかなりあったことがわかる。当時の諸記録における村や町の語の用法はあいまいである、といえよう。さて、フィンチは翌二三日、クンデル (Candere セコス) へ移り二八日まで滞在した。やはりアイの買付けのためであろう。この村は「不正直な不潔な村 (Aldia, ポルトガル語) である」とされた。それからピチュナ (Bachuna 四コス) へ「戻った。」「戻った」というのは、バヤーナへ行く方角から見れば反対方向であるからである。そこでもアイの買付けに従事した筈で、彼がバヤーナへ行ったのは二月二〇日になってからである。バヤーナへの道の両側には畑 (Field) が広がっていた。彼のバヤーナについての記述は後にみよう。

次に、同じくイギリスのアーグラ商館員 P・マンディは一六三〇年代はじめに、「アーグラの周辺四〇、三〇、二〇、一五コス) のところに、アイを栽培し製造するさまざまな町 (Townes) がある。たとえばヒンダウン (Hindowne)、バヤーナ、ピチュナ (Panchona)、ハサーワル (Bashavor)、カーヌア (Cannawa) など」と述べている。⑨ J・ジュルデーもバヤーナの他に、「バラマバード (Primabad かなりの町) で「沢山のアイが製造されている」と述べている。⑩ J・B・タヴェ

ルニエもバヤーナの他にヒンダウンをあげている。ヒンダウンのアイ商人のことは英商館員によってしばしば言及されている。^⑫ もちろん、周知の如く、『アーイーネ・アクバリー』の著者アブル・ファズルもバヤーナの「立派なアイ」に言及している。^⑬

さて、地図Ⅰからうかがえるように、アイの生産地域は、アーングラの西南約八〇kmのバヤーナを中心に、半径五五kmの半円内にはぼ収まっている。八〇kmといえば京都から神戸、関ヶ原、綾部あたりまでの距離であり、畿内というには若干遠いかもされないが、三日行程のところで、アーングラと経済的に強く結びついていたことをうかがわせるのである。蘭英両国商館員やアルメニア人などはアーングラから当地方へアイの買付けにやってくるに、アーングラから織物類などと共に北のラホールや西海岸のスーラトへ運ばれ、さらに諸外国へ輸出されたのである。また、アーングラやファテプルのカーベット産業とアイとの関係も無視できないであろう。^⑭

次に、ファテプル、カーヌア、バヤーナ、ヒンダウン、ワズィールプルなどかなりの数の町村が、アーングラからスーラト(当時西海岸最大の貿易港)へ至る二大街道のうちの北道、すなわちアーングラからアフマダーバード(織物の産地)を経てスーラトに至る街道沿いに位置していたことも、この地方のアイ生産をうながした一要因として注目しなければならない。

先に言及したマンデイは、一六三二年二月に、大量のアイや硝石を積載した二六八頭のらくだと一〇九輛の牛車、一七〇人の護衛からなる英東インド会社の隊商の監督としてアーングラからスーラトに向った。その晩はファテプル泊。翌日はカーヌアを経てニベラ(Zembara)泊。なお、彼はカーヌアから三コスのところループバース(Rupbas)があり、アーングラの城壁などの材料である赤砂岩の産地である、と述べている。さて、翌々日、ニベラを発してバヤーナ泊。翌々日、同地を出発してスカンダラーバードを経てスロト(Sorot)泊。そしてその翌日はヒンダウンに泊っている。^⑮ もちろん、大部隊であり、キャラヴァンサライ泊ではなく、テントを張って野宿を続ける旅であったが。ジュルデーモンもファテプル、バラマバード、スカンダラーバード(かなりの村)、ヒンダウンでそれぞれ一泊してスーラトへ向っている。^⑯ タヴェルニ

エも、ファテプル、バヤーナ、ヒンダウンをあげている。バヤーナには二軒のキャラヴァンサライがあり、ヒンダウンなども宿場町的な性格を有していたといえるであろう。

更に、バヤーナ地方は西方のラージャスターンからヒンドゥスターン平原へ出る出口にあたる軍事上の要衝であった。

バヤーナの町は北東から南西に走る二つの丘陵に狭まれた小さな平野の中の高台上に位置しており、ここから北へは平野が開けている^⑩。アブル・ファズルは「以前アングラはバヤーナ(Biana)に属する村であった」「バヤーナは以前は大きな都市であった」と述べている。一六一〇年頃のバヤーナについて、フィンチは「この都市は大きく立派であったが、今では二軒のサライと一つの細長いバーザールと若干の瀕死の家々を除けば、壊滅状態にある。多くの立派な家々が倒壊し、又、多くの家が(盗賊以外は)人が住まなくなっている。それで多くの通りが全く見る影も無い」と述べている^⑪。ここから、蘭英両国の本格的進出直前のバヤーナの不振ぶりとともに、以前大都市であった様子がうかがわれるのである。町の南四・五kmのスカンダラーバード(現在のスカンドラ)は、マンディによれば、ムガル朝によって滅亡させられたロディー朝のスルターン・スカンダル・シャー(在位一四八九—一五一七)の一時の都であったという^⑫。さらに、カーヌアはムガル朝の創始者バールとラージプート族中彼の最強の敵であったラーナー・サンガとの決戦場であった。

バヤーナのアイ生産がいつから本格的に始まったのか判然としないが、あるいはバヤーナがこのように政治的都市(消費都市)であったことと無関係でないかもしれない。なお、表1の五市場町はいずれも当時のそれぞれの郡(Pargana)の中心であった。この点については、さらに第四章において検討したい。

以上で、アイ生産地の歴史地理的位置についての考察を終え、次章ではアイの生産過程について検討したい。ただし、生産過程自体について当時の諸史料から復元・総合する試みはサルカールによってほぼなされているので、本稿では、主にアイ生産とこの地域の自然条件とのかかわりを見、また一九世紀のイギリス人によるベンガルやビハールでのアイ・プランテーションとの比較——松井透の研究にも依拠して——を通して、生産技術上の諸特徴を明らかにしたい。

- ① Pelsaert, p. 14.
- ② Major H. E. Drake-Brockman, *A Gazetteer of Eastern Rajputana, comprising the Native States of Bikaner, Dholar, & Kauranji*, Ajmer, 出版年未詳。一九〇一年マンナクを使用しているが一九一〇年版に訂正がなされたものと推定される。(以下 GER を指記)。
- ③ 参観本館蔵地測量図『二十五万分之一図印度』No. 54 A, E, 昭和一七年。「備考」の「本図の一九二四年印度測量部測繪二十五万三千四百四十分一と測繪圖二二十五万分之一に伸写し四色に彩色復録ヤルモノナリ」云々の「説」を知せよ。同『十三万五千分之一図印度』No. 54 B, E, F, 昭和十七年。これらは「一九二四年印度測量部測繪十二万六千七百二十十分一と測繪圖六十二万五千分之一に伸写し四色に彩色復録ヤルモノナリ」云々の「説」を知せよ。
- ④ *Census of India 1961*, vol. XIV, Rajasthan, Part IX-A, *Census Atlas*, by C. S. Gupta, 1967, pp. 114-159.
- ⑤ Pelsaert, p. 14 & n. ナルーンは「四」をよぶ。J. N. Sarkar, *op. cit.*, p. 139.
- ⑥ Pelsaert, p. 14 & n. J. N. Sarkar, *op. cit.*, p. 139.
- ⑦ A. S. Beveridge, (ed.), *The Babur-nama*, Leiden & London, 1905, Reprinted, London, 1971, fols. 327b-328b; English tr. by A. S. Beveridge, London, 1921, Reprinted, New Delhi, 1970, p. 681.
- ⑧ W. Foster, (ed.), *Early Travels in India (1583-1619)*, London, 1927, pp. 148-151. (以下 Early Travels を指記)
- ⑨ Peter Mundy, *Travels*, vol. II: *Travels in Asia*, 1628-34, ed. Sir R. C. Temple, Hakluyt Society, 2nd Series, XXXV, London, 1914, pp. 225-235. (以下 Mundy を指記)
- ⑩ John Jourdain, *Journal*, 1603-17, Ed. W. Foster, Hakluyt Society 2nd Series, XVII, Cambridge, 1905, pp. 167-168. (以下 Jourdain を指記)
- ⑪ Jean-Baptiste Tavernier, *Travels in India*, 1640-67, tr. V. Ball, 2nd Edition revised by W. Crooke, London, 1925, First Indian Edition, New Delhi, 1977, p. 72. (以下 Tavernier を指記)
- ⑫ *English Factories in India*, ed. W. Foster, 13 vols, Oxford, 1906-27. (以下 EF を指記) EF, 1651-54, pp. 9, 51. 英人のマンナクを意味しているが EF, 1642-45, pp. 303-304, 参照。マンナクはマンナクと一國を離れマンナクを大品に買仕る (EF, 1646-50, p. 62)。
- ⑬ Abū-al-Fazl *Ā'in-i Akbarī*, Ed. Blochmann, Bib. Ind., Calcutta, 1867-77, vol. I, p. 442. (以下 *Ā'in-i Akbarī* を指記) English tr. vol. II, by Jarret, revised by J. Sarkar, Calcutta, 1949, p. 192.
- ⑭ トーナウトトトトのローヤル・メダルに記されている Pelsaert, p. 9; Tavernier, vol. I, p. 72 を参照せよ。
- ⑮ Mundy, pp. 225-235.
- ⑯ Jourdain, pp. 167-168.
- ⑰ Tavernier, vol. I, p. 72.
- ⑱ *Early Travels*, p. 152.
- ⑲ GER, pp. 15-16.
- ⑳ *Ā'in-i Akbarī*, I, pp. 441, 442, tr. II, pp. 191, 192.
- ㉑ *Early Travels*, pp. 151-152.
- ㉒ Mundy, pp. 234-235. cf. *Early Travels*, p. 152.
- ㉓ J. N. Sarkar, *op. cit.*, pp. 131-138.

二 生産過程

栽培過程 我國の蓼科のアイとは異なり、インドのアイは豆科に属していた (Indisofara の一種)^①が、この地方では「四

月から六月まで畑は堅く乾燥し、また暑気のために犁耕や播種に適さない」ので、六月のはじめ、雨季のはじまりを告げる一雨を得て耕起と播種を行なった。散播か条播かは明らかではないが、生育途中での除草の必要からみて厚播ではなかったものと思われる。一ビーガ(この場合一六アール)当り、一四〜一五ポンドの種を蒔くという。さて、適量の降雨があれば、四カ月程経てアイの木が七〇cmほどに生長したところで九月末か一〇月はじめに根元から一〇cm位のところで刈取った。その間雑草が繁茂するとアイの豊作の前兆であったが、アイの根をいたため、アイの生育をおくらせるのを防ぐために「経費のかかる」(expensive)除草が必要であった。^②

以上の栽培過程は一九世紀のイギリス人による高度に商業化されたアイ・プランテーション^③のそれと基本的に大きな相違はないが、一七世紀の場合の一つの特徴は、一年目の刈取り後の刈株から出る新芽 (raton) を生育させ二年目の木とする点にあった。

この点については諸史料の記述には互いに矛盾した点があり、ペルサルートの記述自体にも矛盾がある。彼は、一年目の木をナウティ、二年目の木をジャリーとする。ジャリー木が三五cmセンチ程に成長した時にナウティ木の時と同じ方法で刈取る。雨が十分であれば、ジャリー木が大いに繁茂し、八月初頭、九月初頭、九月末から一〇月初頭の三度の刈取りが可能である。しかし普通は二度であったようで、ペルサルートの記述から推量するに、実際はこの二年目の一度目の木と収穫をジャリー、二度目のそれをカテルと人々は呼んでいたように思われる。

そして、アイの品質は上からジャリー、ナウティ、カテルの順で、カテルは粗悪で価格も半額で、刈取られずに翌年の種子を取るために放置されることも多かったという。^④

以上のような一本の木から二年間に三度刈取る方法は、一九世紀にもインド人による在来の方法として残ってはいしたが、アイ・プランテーションでは採算があわれないとしてほとんど行なわれなかった。^⑤ ナウテイより優秀な二年目のジャリーが一九世紀に栽培されなくなった理由について、ハビーブは、水路灌漑のもとでは、バヤーナのような井戸灌漑（後述）の補助のもとでほどアイの品質は良くならず、二年間アイだけのために排他的に畑を使用するよりラビー（冬）作物と輪作する方が有利であったのだろうとしているが、妥当な見解だと考える。^⑥ ただし、品種の違いも考慮しなければならぬだろう。

次にアイ栽培の季節節についてみれば、プランテーションでは栽培地域（下ベンガルとビハール）の条件にに応じて主に十月時か春時（二、三月）がとられ、インド人による土産アイの場合でもむしろバヤーナに近いドアーブ（ガンジス、ジャムナ両河間の地方）では春時（三、四月）であったのに対し、より東部のベナレス地方ではバヤーナ地方と同じ六月であった。^⑦ ドアーブのコイルやクルジャでも一七世紀にはバヤーナと同じく六月時が行なわれていたと思われるが、水路灌漑の発達した一九世紀には早魃の懸念が減少したためであろうか、春時を行ない八月に刈取りをすませるように変っているのである。^⑧ それはまた、冬作の播種期との関係であろう。ベナレス地方では井戸か溜池灌漑で刈株から翌年の木を育てることもしばしば行なわれたというのもバヤーナ地方と似ている。なお、灌漑水路の整備のおくれたアーングラやマトゥラ地方では一九世紀にアイの栽培はほとんどみられなかったというから、両地方に近接するバヤーナ地方においても同様であったと思われる。^⑨ ペルサールトは、この地方のアイ生産と水との関係について、およそ次のような指摘をしている。すなわち、「生育中のアイは他の作物よりずっと多くの出来事や災難に遭遇しがちである」として、過去三年連続の蝗の害により、アイの葉が「一望の限り」食べ尽くされたことや、冬期の冷害について述べている他に、最も重要なこととして、雨季における降雨不足やその遅れが種子を土中で枯らせたり、ジャリー木の根を大変痛め、他方降雨過多と日照の欠乏が、すぐに木を腐らせたり、一本一本洗い流してしまうことを挙げている。^⑩

以上から、この地方のアイ作は水路灌漑ではなく、主要には天水に依存していたことがわかる。なお、この地域の年平

均降水量は六三五mm、マルトンヌの乾燥示数でいえば約一七であり、乾燥示数一〇〜二〇の灌漑を要しない乾燥農業の可能な地域であることが確認できる。^⑩

ところで地図1によれば、アイ作村の多くは、この地域を西から東へ流れるバンガンガ川およびガンビール川から一〇km以内の平野部に立地し、ヒンダウン、トダ・ビム、バヤーナなどの農地も含めて、全て標高一九〇〜二五〇mの平地にあった。地方図によれば両河川は涸川とされているが、『東部ラージプターナ地誌』によれば、二〇世紀初期においては、両河川の流域では雨季に氾濫が二、三日続き、それを利用しての溢流灌漑が行なわれた。このため氾濫によってカリフ作(夏作)がほとんど犠牲になるとしても、ラビー作でそれ以上の増収があるため災難だとはみなされなかった。氾濫の際、バンガンガ川の水は主に北側の低地へ溢れ出た。ガンビール川では、ダヒナ村付近で人口的に南側へ溢流させ、北側へも自然的溢流があった。以前にはバンガンガ川の氾濫を自由にコントロールできなかったため、あまり利益をもたらさなかったが、一九世紀末の灌漑設備の整備でコントロールできるようになった、という。^⑪

しかし、一七世紀にこのように毎年のように氾濫が起っていたとは思われないし、アイは当然氾濫の影響のより少ない土地に植えられたことであろう。なお、アイ作村が比較的両河川に近い地域に展開している理由はいま一つ判然としないが、冬季の土中の保水や土壌の肥沃さのためであろうか。

いずれにしろこの地帯は洪水の害をさけることはできなかった。ペルサルトは次の如く述べている。

一六二二年九月に雨が大変長く続いたので、この地方一帯が洪水に見舞われた。その結果、買手の商人がいけないのではないかと小農民たちが心配したほど豊作の予測されていたアイの木が完全に洗い流されてしまい、残った木は四〇〇梱も産出しないほどであった。そしてその結果、富裕でその全生涯に渡ってアイの植付けに係ってきた多くの人たちが大変貧乏になり、その結果、今日(二六二六年)に至るまで、以前にはるかに及ばぬ量のアイしか植付けられていない。従来バヤーナ付近のアイの収穫は四、〇〇〇梱であったが、今日では精々以前の半分しかない。^⑫

この文章の内容については、後に検討することにして、ここでは洪水の影響の大きさに注目しておこう。一六四〇年も過度の降雨がアイ作をだめにして^⑭いる。

他方、この地域は当然のことながら、より頻繁に旱魃にみまわれた。一六三〇年～三二年のグジャラートとデカンでの大饑饉の際には、バヤーナ地方でもくりかえし旱魃が起き、アイ価格は大いに騰貴した^⑮。又、イギリス側の記録のみによっても一六四四年、四六年、四八年、五〇年と一年おきに旱魃や雨不足がみられたし、六三年にも雨不足をみたことがわかる^⑯。一六五七年八月には、

現在のような降雨は過去多年見られなかった。それが大変多いので、アイ・砂糖・綿花および穀物の生産は大豊作が予測できる。従って昨年より安くなりそうである^⑰。

とアーグラから報告されている。以上からうかがえるかぎり、一六四〇年代から五〇年代にかけて豊作の年は少なかったように思われる。

このような雨不足は井戸水灌漑によって補なわれた。この地方の雄牛にロープをひかせて深い井戸から桶(Bul)をおそらく皮袋(Bag)で水を汲出す方法は、バールによる描写で夙に知られている。彼は、「これは労多くして不潔である」と述べている。なぜなら、「一人の人が雄牛を駆りたてねばならない。一人の人が桶の水を注ぎ出さねばならない。毎回、雄牛が進んで桶をとり出して向きを変える時に、そのもどりのロープが、雄牛の尿や糞で汚染されている雄牛の道に接触して、再び井戸へ落ちる」からである^⑱。

ところで、アイ作にとって、硬水の井戸水を使用することが最高のアイを生産する秘訣であった。ベルサールトは、バヤーナの町の付近で生産された「真のバヤーナ産アイ」(約三〇〇梱)が近隣の村々のアイより優秀な理由をこの硬水の用に帰している。軟水の使用はアイを固く粗悪にするので、「硬水で栽培されたアイの木は、同じ畑で軟水で育てられた木よりも少なくとも一マウンド当り一ルピー高値のアイを産する^⑲」フィンチもカーヌアのアイの良さを「土壌の緊密さ

(fastness) と水の塩辛さ」に帰しており、また、アクバルがフアテプルの都を放棄しなければならなかったのは、同地の硬水が飲料水として不適だったためだとしている。^④ 『地誌』によれば、バーラトプル藩王国の灌漑井戸の約三分の一は硬水の井戸でそれらは中央部の諸郡に多く、また深い井戸は一般に地中の石灰や塩分のために塩辛かった。^⑤ 一九世紀には石灰などがアイの肥料として最適だとされており、バヤーナ地方では硬水中の石灰分などが、アイにとっての肥料分となっていたのである。^⑥ すなわち、単に水不足を補うだけでなく、施肥のかわりに積極的に井戸水灌漑が行なわれたのである。

すでに引用したように、フィンチはカーヌアのアイの質の良さの理由を硬水とともに土壌の緊密さに帰していたが、それは土粒の細かさを指すより、各土粒が緊密に結合していることを指していると思われる。バヤーナ地方の土壌は一般にローム及び砂質のローム土壌であって必ずしも微細だとは言えないからである。^⑦ いずれにしても、ウツタル・プラデン州やビハール州の一九世紀のアイ作においてもローム土壌が好まれたということである。^⑧ なお、既に指摘されているように、アイは豆科植物として土壌を肥沃にする性質があったので、後作の作物に好影響を与えることになる。

染料抽出工程 刈取ったアイの木は、あらかじめ水を張って準備してあったチャーバッチャ (chah-pachha) と呼ばれる水槽 (浸水槽) に浸して一六〜一七時間放置する。それから、アイの葉から融け出した染料分を含んだ水を、その水槽の排水口から第二のやや下方に設置された少し小型の丸い水槽 (攪拌槽) に流し込む。この水槽には二、三人の人が中にはいり、長い棒でその水を攪拌する。その結果化学変化により水が暗青色に変化すると、再び約一六時間放置する。そして染料分が水槽の底の丸い容器に沈澱すると、水を流し去り、残った染料分を取り出し、綿布の上に広げて乾燥させ、それを球形に丸めて土製の容器に入れ固く密閉して日光と風をさえぎって保存し、買付け商人に売り渡す時を待つのである。^⑨

松井透などが指摘するように、バヤーナ地方のこの抽出工程はアイ・プランテーションと同じ「緑式」方法——原料のアイの木を刈取って時を移さずただちに仕事にかかる方法——で、この方法は一七世紀にはクルジャヤコイルでも採られたようであるが、サルケージ地方では「干式」と称せられる方法——アイの葉を乾燥して保存し、便利な時を選んで加工

工程にとりかかる方法——が行なわれていた。もちろん、前者が染料の品質の点ですぐれていたが、刈取り後、短期間に集中して行なわれる必要があった。^②

更に、浸水槽と攪拌槽の二槽を使用するという点でバヤーナ地方やコイルやクルジャの抽出工程は、クルジャの付近の村々や、バヤーナの北方約一〇〇kmに位置するメワート地方や、サルケージなどの一水槽のみを使用する方法より優れていたのである。^③

バヤーナ地方では、攪拌槽内で同時に作業をする人数が二、三人であったという点で、一〇余人が同時に作業をした典型的なプランテーションよりずっと小規模ではあったが、その攪拌槽は直径三メートル程の円形で表面に十分漆喰が塗ってあった。^④又、マンディは「多くの水槽が一緒に設置されている」と述べている。^⑤彼の述べるところは、アイ商人や仲買商人からの伝聞ではあるが、多くの攪拌槽を並べて人々が共同作業をするような場合もあったことがうかがわれるのである。また、たとえ二、三人の場合でも、おそらく成年男子が主体であったのであろうから、一家族では無理な場合も多かったと思われる、ハビーブの示唆するように農民間の何らかの共同作業があったと考えることができよう。^⑥また、このような水槽を設置することは資力的にも個々の小農民にとって必ずしも容易でなかったと思われる。

なお、バヤーナ地方にくらべ、プランテーションは、注水のための大きな貯水槽の存在や、攪拌槽の底に沈澱した染料分を一旦煮つめる工程の存在、長時間の入念な乾燥などの点ですぐれていた。^⑦そして、バヤーナ地方のアイも、プランテーションのアイと異なって、砂まじりであるという汚名をうけることがしばしばあった。^⑧

要するに、バヤーナ地方のアイの栽培は、除草や井戸水灌漑にみられるように、かなり集約的であったし、製造方法も、小規模ではあるが、プランテーションと基本的には同一の工程をとり、相当の資力と労働力を要するものであったといえるであろう。

次章ではアイ生産者の経営形態を検討してみたい。

- ① 一七世紀のベンガル地方のムンデは *Indigofera* の一種ではあつたが、一九世紀のイギリス人のプランテーションで栽培されたもの (*Indigofera tinctoria*, Linn. の一変種または栽培品種の一型) である。I. tinctoria var. macrocarpa, D. C.) とは異なる。この点については 松井透 第一論文 六七—六八頁参照。ちかぢ G. Watt, *The Commercial Products of India*, London, 1908, Reprinted, New Delhi, 1966, pp. 660-664 を参照 (以下 CP と略記)。
- ② 以上は 中野 Pelsaert, pp. 10, 48 を参照。ベンチの異なる見解については J. N. Sarkar, *op. cit.*, pp. 131-138 を参照せよ。このことは 特に彼らに依拠した部分を除くことは注記せよ。耕起開始時期については Mundy, p. 222 を参照。なほ一九世紀における播種量は下ベンガル省委书记二〇—三〇ポンド、北西州 (現在のウッタル・プラデシュ州) では一五ポンドであったことから、ベンガルの播種量はさかたに低くてもよい。G. Watt, *A Dictionary of the Economic Products of India*, 6 vols., London and Calcutta, 1889-93, vol. IV (1890), pp. 404, 407. (以下 EP と略記)
- ③ ベンチのモンゴロイドの農民たちは前貸金を与へて、耕作契約を結ばせるものや、イギリス人工場主が地主として、小作人たる農民たちにペイを強制耕作させるものが多く、直営制のプランテーションが主流を占めたわけではなから、(ちかぢなつて) EP, pp. 394-399, 422-427, 松井透 第一論文 七〇—七二—七三—七六—七九頁、田中於菟次、荒松雄、中村平治、小谷任之『世界の歴史 24 (愛媛のインテリ大産)』講談社、昭和五三年、二三—二四頁、B. B. King, *The Blue Mistry*, Calcutta, 1966, pp. 29-30 参照。
- ④ Pelsaert, pp. 10-13, ベンチのモンゴロイドは一年一回の三年間同一株から生じた木を刈取ることをが、一番詳細なムンサールトに依拠してあげてある (*Early Travels*, p. 153; Mundy, p. 223)。Habib, *op. cit.*, p. 42 ならびに J. N. Sarkar, *op. cit.*, pp. 131-132 も同様の見解である。ただし、後者が「同時代の史料は全く二年間に三回刈取る」と言及してある」というのは明白に誤りである。
- ⑤ EP, pp. 402, 407-415; CP, p. 672; 松井透 第一論文 七八、八田岡。
- ⑥ Habib, *op. cit.*, p. 43。
- ⑦ EP, pp. 400, 403, 404, 406-407. ただし、南ベンールでも六月に播種を行なはせられたことがある (*Ibid.*, p. 402)。
- ⑧ *Ibid.*, p. 407。
- ⑨ *Ibid.*, p. 408。
- ⑩ Pelsaert, p. 13。
- ⑪ 乾燥農業については織田武雄・末尾浩行・応地利明『西南アジアの農業と農村』一九六七年、一七—五二—五三頁を参照。年降水量については Y. L. Dashora, *Jodhpur, 1958*, p. 38 を参照 (以下 Census 1951, Rajasthan と略記)。なほ『地誌』一九六〇—一九六一年間の平均ムンデは五〇〇を掲げている (GER, p. 53)。
- ⑫ GER, pp. 69-74。
- ⑬ Pelsaert, p. 13。
- ⑭ EP, 1637-41, p. 278。
- ⑮ EP, 1630-33, p. 131。
- ⑯ EP, 1642-45, p. 202; 1646-50, pp. 62, 219, 322; 1651-54, p. 56; 1661-64, pp. 320-321. 總論 12 のことについては Habib, *op. cit.*, pp. 100-110; Moreland, *op. cit.*, pp. 205-219 を参照。
- ⑰ EP, 1655-60, p. 118。
- ⑱ A. S. Beveridge, (ed.) *op. cit.*, fol. 274; N. Himinskt, (ed.),

Baber-nameh, Kazani, 1857, p. 355; Beveridge (tr.), *op. cit.*, p. 487. 『ベーンブル・ナーブ』では「雄牛は単数形になっている。なお『地誌』では二頭セツタになった雄牛が坂を降りることによって皮袋を井戸へつひりおちた」とある。井戸の深さは乾季には地下二〇〇に及ぶ (GER, p. 74)。

⑨ Pelsaert, pp. 13-14.

⑩ *Early Travels*, pp. 150, 151.

⑪ GER, p. 74.

⑫ cf. G. Mukherji, *Handbook of Indian Agriculture*, Calcutta and Simla, 1923, p. 301.

⑬ *Census 1951*, Rajasthan, pp. 15, 38.

⑭ EP, pp. 407, 425.

⑮ Pelsaert, pp. 10-11. 水槽をチャーナムチャと呼ぶ点については

Mundy, p. 222 及び EF, 1646-50, p. 219 参照。

⑯ 松井透『第一論文』八四―八九頁。第二論文、四九頁。Sarkar, *op. cit.*, pp. 133-136.

⑰ Pelsaert, p. 15; EF, 1646-50, p. 219. 松井透『第一論文』八六―八八頁を参照せよ。

⑱ Pelsaert, p. 10. Mundy, p. 222 の述べる水槽の大きさは (五〜六トン) でありサルナーハトは一致する。漆喰については *Ibid.*, p. 222; Tavernier, vol. II, p. 8 を参照せよ。一九世紀の水槽については EP, p. 428 を参照せよ。

⑲ Mundy, p. 222.

⑳ Habib, *op. cit.*, p. 59.

㉑ 松井透『第一論文』八六―八九頁。EP, pp. 428-434.

㉒ Pelsaert, pp. 11-12; EF, 1642-45, pp. 122, 201.

三 経営形態

アイ栽培者とアイ染料の製造者との社会的分業は、いわゆる「干式」の方法をとるサルケージ付近のアイの場合には一般的にみられたが、「緑式」の方法をとるバヤーナ地方では史料上うかがえないので、本稿でも栽培者即製造者とみなしてこれを一般的に生産者と呼び、論を進めていこう。そしてこの生産者を、(1) 農民、(2) 商人、(3) ザミンダールの順でみていこう。

(1) 農民 当時のアイ生産農民には、少なくとも「富裕」な農民と「前貸金に強く束縛された」農民がいた。

すでに引用したように、ペルサルトルによれば、一六二一年の大洪水の直前に「大豊作になり買手の商人がいらないのではないか」と懸念していたのは「小農民」(Peasants)であったが、大洪水の結果、「富裕で、その全生涯にわたってアイ

の植付けに係ってきた多くの人たちが」が大変貧困化し、以後この地域のアイ生産高が半減した。この「小農民」を即「富裕」な多くの人たちと解釈することは、語義上からは直ちにはできたいが、文脈上からは後者の多くも農民であったとみなしてよいであろう。サルカールのようにこれをアイ作経営を行なう商人とのみみなすことはできない^①。確かに後述のように、バヤーナの町自体にはそのような商人は「いくらか」(some)いたが決して多くはなかったのである。

一六三三年一月に皇帝シャー・ジャハーンが帝国内のアイの独占をはかり、一商人に向う三年間帝国内のアイの独占的買収権を与えたことは、この独占権は途中で放棄されざるをえなかったけれども、アイ栽培者に一時的に大打撃を与えた。当時アングラの英商館員であったフレムリンは、後に、「あの致命的なアイの〔独占の〕請負は、アイを生産した誰も彼にも負いきれぬ重荷を負わせ、そして、以前彼らがアイのみから得た利益でもって建設した堂々たる建物 (stately edifices) 以外には何も見るべきものを彼らに残さなかったのである」と述べている^②。又、彼は同じ手紙のすぐ直前の箇所でも「アイ生産者 (makers) たちに対する前貸金は絶対に必要であった。オランダ人は毎年このように一〇万ないし一五万ルピーを前貸するのが常であった」と述べている^③。

彼はこの手紙において、アイへの投資により会社に損失を与えた自らの立場を弁明しているのであるが、ここからは前貸金を受けつつもアイ生産によって利益をえて立派な家をたてた（これは比喩的表現かもしれないが）アイ生産者像が浮かびあがってくるのである。この場合も、このようなアイ生産者の中にバヤーナの商人兼農業経営者を含めて考えることができるが、それだけでなく富裕な農民の存在を考えざるを得ない。村長などの有力農民がアイ生産に無関心であった筈がないからである。

他方、アイ生産者の中には、商人の前貸金を借りてそれに強く束縛されている者も多かった。ペルサールトによれば、カーヌアなどの市場町に住み、長年アイ取引に従事している資産のあるヒンドゥー商人やムスリム商人が、アイに対して何ヶ月か前に前貸を行なって、他の誰にも売らせないように負債者を束縛していたのである^④。

営農資金の前貸制度は当時すでに確立した慣行であったが、ある程度の資金を必要とし、豊凶の変動が激しくともそれだけに利益を得る機会も多かった商品作物アイの生産に当っては、特に前貸金の魅力と必要性は大きかったことであろう。しかし、既に若干言及したように、全ての農民が前貸金によって特定の商人に完全に従属していたわけではない。前貸金をうけた農民でも、一定の契約分以外のアイを他の商人に売る可能性を否定されてはいなかったと思われる。それは、アルメニア商人が、前貸金をせずに、村々を回り歩き、直接農民たちから少量ずつアイを買うことによって、その翌日にはアイ相場の高騰がひきおこされていることを、ペルサルトルが非難していることから明らかである。彼はまた、オランダ人も、豊作の年には一、二人の経験豊富な人物を八月か九月はじめ（つまり製造期）に村々へまで派遣して真に良いアイを買うべきである、と忠告しているのである^⑥。また、第一章で紹介したように、フィンチは一月から一二月にかけて二ヶ月程アイ生産地の村々を回っていた。

富裕な農民に対する前貸などには、むしろオランダ人やイギリス人を含めて、アイを買付ける商人たちの側の、良いアイをより安く買いたいという願望から行なわれた側面も強くあったといえるであろう。

以上から、アイ生産農民の中には、商人の前貸金によって完全に束縛された農民、前貸金を必ずしも必要としない農民、前貸金をうけつつもそれによって完全には商人に従属せず富裕になりえた農民などの諸階層があったことがわかれた。そして洪水の後などに大いに貧窮化した農民にはむしろ危険度の高いアイ作を放棄する傾向もあったのである^⑦。なお、農民たちの具体的な経営規模などは不明である。

(2) 商人 ペルサルトルは次のように述べている。

「バヤーナの町には何人かの富裕な商人が住んでおり、彼らの代表は、ミールザー・サディークとガーズイー・ファーズィルで、彼ら（二人）はアイのほとんどを植付けており、彼らは何シーズンか我々（オランダ人）以外の誰にも売らなかったことがある。

その価格は彼（ミールザー・サディーク）の家で定められ、通常、カーヌアや他の村々での相場より一マウンド当り一ルピーは高

い値段である。なぜなら、すでに述べたようにその品質がより優秀だからである。そして、値段が定められる以前ではなく定められた後に、誰でも自分の選んだ人物に売ることができるといえる。ミールザー・サディークがバヤーナで最長老〔の商人〕だから彼にこのような追従や敬意が示されているのである。」

ここに示されている事例は、当時のムガル帝国における商人の農業経営への進出の代表的な事例であると同時に、他にはめつたにみられない例外的な事例であるとみなされている。^⑨

ミールザー・サディークがあつてゐる尊敬の点からみても、彼が農業経営にたずさわつてゐる期間も長いものと思われる。また表2からうかがわれるように、一六世紀末のバヤーナ郡内にはムスリムのザミンダールはいないので、彼もザミンダールではなかつたものと思われる。

彼とガーズイー・ファーズイルがバヤーナの町近辺の最も優秀なアイのほとんどを生産しているということと、真のバヤーナ・アイは年産三〇〇梱程度であつたといふことから、彼らの経営規模について若干の推定を試みてみよう。一ビーガ (Bigha-I-Hahi 約二四アール) 当りアイ製品の生産量は一九世紀末のウッタールプラデシュ州の水路灌漑地の例では〇・二〇マン (1 man=約二五kg) とされ、ベンガルのプランテーションでは〇・一一〇・一三マン、ビハールのプランテーションでは〇・二二マンと推定されている。^⑩ 一七世紀の当地方でのそれは判然とはしないが、ベルサールの記述より〇・四五〇・七五マン、^⑪ 『アーイーネ・アクバリー』より〇・二五〇・四マンといふ数値を得る。^⑫ バヤーナのアイの優秀さと播種量の多さを考慮に入れてもこれらの数値は過大にすぎるといふ思われるが、栽培面積の過大評価を避けるためにこれらを用いれば、三〇〇梱 (一梱は約四マン) を生産するため、それぞれ六四〇〇〜三八四ヘクタール、一一七三〜七二〇ヘクタールが必要となる。たとえミールザー・サディークがその四分の一を経営していたにすぎなかつたとしても最低一〇〇〜二〇〇ヘクタール程度を経営していたことになる。実際には数百ヘクタールの経営が考えられるであろう。

(3) ザミンダール 表2にみるように、当時この地方にもラージプートやジャートをはじめとする若干のカースト

からなるザミンダールが存在した。彼らは個々にはその兵力からみて、ベンガル地方やラージプターナの大ザミンダールに比してずっと小規模で、小谷汪之の説くような在地領主的存在であったと思われる。^④

ところで、当時のヨーロッパ人の諸史料はザミンダールによるアイ生産の有無については何ら言及していない。しかし、彼らは、自らのザミンダールとしての取分（地税のうちから一〇〇程度）や役得や慣習的な心付けなどを支配下のアイ生産農民から徴収する他に、一般農民よりずっと広い農地を保有していたはずであり、彼らも当然アイ生産を行なっていたと思われる。すでにみたところの富裕な農民の中に彼らの一部も含まれていたかもしれない。

以上の農民・商人・ザミンダール等による経営の具体的な内容について、当時の史料は若干の共同労働の必要性を示唆するものの、それ以上は何も積極的に物語ってはくれない。しかし商人やザミンダールについては、ハビーブが指摘するように、カースト規制によって土地保有を許されない下層カースト民や種族民などを雇用労働者として用いる直営地経営 (*khud kash*) が、この地域でも行なわれていた可能性がある。また、グジャラートのザミンダールの例で小谷汪之が検証したような、種族民などを下人的労働力として用いた可能性もあるだろう。なお、ハビーブは、直営地経営において一般農民を農地において農奴的な無償労働に従事させていた可能性は少ないとしているが、小谷汪之はグジャラートでそのような例を見出し出しており、当該地方でのこれらの点の検討は今後の課題として残しておきたい。^⑤

④ Sarkar, *op. cit.*, p. 138. ただし、彼も p. 150 では「繁栄した耕作者」の存在を認めている。

⑤ EF, 1634-36, pp. 245-246. 松井透、第一論文を参照せよ。

⑥ EF, 1634-36, p. 245.

⑦ Pelsaert, p. 16.

⑧ *Ibid.*, p. 16.

⑨ *Ibid.*, pp. 15-16.

⑩ 先に言及した皇帝がある商人にアイの独占的販売権を請負わせた事

件の際に、なぜ皇帝自身が直接アイを独占したのかということの理由として、もしそんなことをすれば、「栽培者たちは自分の土地を耕すにも、その間、食ってゆくことができなくなりましょう。そこで多くの者が仕方なく故郷をすてどこかよそへ逃げ散ってしまうでしょう」(松井透)ということを英商館員があげている。事実この時には、「一般に思いきってそそっかしやの人々なので、アイ栽培者たちの中にはもう、アイを根こぎにしてしまったものも多いのです。」(松井透)と報告されている (EF, 1634-36, p. 7; EF, 1630-33, p. 325).

松井凌、第二論文、四三、四五頁)。このようなアイ栽培者の多くは

おそらく一般小農民であつたのであろうが、思いきつてアイを根こぎにした農民の姿勢には積極的な経営者の側面がうかがえるであらう。

なお、一六四四年にも、二年続きのアイの安値と、「非常に重い課税の下でこれではとてまよつてゆけなく」といふことが原因となつて(松井記)アイの播種量が減少したとされる(BF, 1642-45, p. 202. 松井凌、第二論文、五〇頁)。

⑧ Pelsaert, p. 17.

⑨ Habib, 'Potentialities of Capitalistic Development in the Economy of Mughal India, *Enquiry*, New Series, vol. III, No. 3 (Old Series No. 15), Winter 1971, New Delhi, pp. 20-21. (以下、Potentialities と略記)

⑩ Pelsaert, p. 13.

⑪ EP, pp. 405, 409.

⑫ ヘルサールの叙述(p. 10)より、一ボーガ(彼の場合約一六アール)の土地から収穫したアイの木を浸水槽に入れ、次いで撈拌槽に移

四 市場構造

本章では、アイ生産農民と市場との関係について検討したい。

まず、各村の農民が自らアイ製品を中心的市场町(表1の五町)へ運送して商人たちに売り捌くという例は、当時の史料にはあらわれない。ただ、一六五五年から五六六年にかけて、この地方のアイ価格が暴落したので、バヤーナ地方の商人たちが大量のアイを直接スーラト港まで送った時に、栽培者たち自身も若干のアイを同港まで売りに行くという冒険を試みているが、これはそれに要する経費などの点からみて、比較的富裕な農民の行為であつたと思われる。

して、一槽あたり二二〇セル(20 ser = 1 man)のアイ染料を得るとみて、本文中のボーガ当り生産量を算出した(ヘルサールのボーガについては、Habib, *Agrarian System*, pp. 363-364を参照せよ)。

⑬ 『アーイーネ・フクバリー』によれば、一ボーガ当りのアイ(染料)の産額は一五八ダーム一九ジッター(一ルビー=四〇ダーム、一ダーム=二〇ジッター)で、これは約四ルビーである。またアイ染料の価格は一マン当り一〇〜一六ルビーである。以上から本文のボーガ当り生産額を推定した(*Fin-^e Albert*, vol. I, pp. 360, 442, tr. vol. II, pp. 106, 191-192. など Brochmann は一〇〜一二ルビーと読んでいるが、ここではルビーに従つて一〇〜一六ルビーとみなした)。

⑭ 小谷汪之「ムガル期インドにおける在地領主——南グジャラト地方のデサーイーについての考察——」(東京都立大学『人文学報』第九七号、一九七四年、一一五一頁を参照)。

⑮ Habib, *Potentialities*, pp. 19-21. 農奴的賦役労働に対する否定的な見解は、Habib, *Agrarian System*, p. 150を参照。デサーイーの経営については、小谷汪之、前掲論文参照。

従って、むしろ商人が農家の庭先まで買いに行くか、あるいは少なくとも農村内部へまで買いに行くというケースが一般的であった。

この地方へは、従来からアルメニア商人や「モグル人」と呼称される商人——おそらく中央アジアやイラン方面出身の非インド人ムスリム——が買付けにやっつけてきたが、少なくとも前者はしばしば、既述のように、各村をめぐりつつ、前貸金を与えずに、少量ずつ買っていた。また、オランダ人やイギリス人も市場町の商人から買付ける一方、条件があれば農村内部へはいりこみ、前貸金で束縛して、あるいは前貸金なしで買付けていった。これらについては、すでに若干の例を示した。^③

しかし、農村での買付けにもっとも活躍したのは、すでにみたように、中心となる市場町に長年在住して前貸金によって農民のアイを独占的に買占めようとする「資産のあるヒンドゥーやムスリムの商人たち」であった。特に、ヒンドゥー商人は「口論と甘言で農民たちを説き伏せて、自分たちに甘い秤量をすることによって」他の誰よりも利益を得ていた。^④このようにして買われたアイが、その商人たちの居住する市場町へ運ばれ、アングラからやって来たオランダ人やイギリス人をはじめとする各種商人に対して売られた。従ってこれらのヒンドゥー商人やムスリム商人は上級市場商人と農民との中間に介在する仲買商人的性格を有していたのである。実際には、彼らの下に、彼らの代理人又は末端買付け人がいて農民からの買付けを行っていたこともあったであろう。

さて、このようなヒンドゥー商人やムスリム商人の影響下にある村々が、表1における各中心地（市場町）の下にグループ分けされている村々であったと考える。そして、各々のグループは、少なくともアイ商品に關しての市場圏であったとみなす事ができる。各市場圏の範囲は、バヤーナを中心とするものが直線距離で半径約三六km、カーヌアの場合は一四km、バサーワルとヒンダウンではそれぞれ二四kmであった。

やや詳細に検討してみると、地理的距離あるいは直線距離から見て、ニベラ、クルカ、クンデル、ピチュナ、ウッチェ

ンなどはバヤーナよりむしろカーヌアに近いのにもかかわらず、バヤーナ市場圏に所屬している。またナードバイも、バサーワルの方に近いのにもかかわらずバヤーナに所屬している。このことはバヤーナというアイの大市場の有する吸引力の強さを示すものであろう。単なる「小さな田舎町」であるカーヌアとバヤーナの差であろう。少なくともこれら五つの中心地では、アイ染料の出荷期に市 (Market) が開かれたとみてよいが、既にみたようにバヤーナでは「市が他所よりずっと遅れて開かれ」た。ここでのアイ相場はカーヌアなどのそれより高値であったが、ナードバイなどの遠方からもたらされたアイも、この高い相場から好影響をうけたのではなからうか。なお各市場町間の間隔は直線距離でほぼ齊一的に約三〇kmである。これは牛車(一日四〇km)で約一〇時間行程であり、殆どのアイ村と市場町との距離はこれ以下である。^⑤

以上にみた市場町は、一九世紀北インドの中央部において各県にいくつかず存在した第一次集荷市場に相当している。^⑥そして、それらは、G・W・スキナーの標準市場町・中間市場町・中心市場町・地方都市・地域都市という分類にあてはめれば、市場圏の大きさ、市場町の機能などから見て、明らかに標準市場町を超越した段階のものであった。中国の中間市場町の機能については、「農民の訪市はむしろ例外であり、交易も金融もサービスも娯楽も、いずれも農民の日常の消費・需要を超え、郷紳の消費・需要や『中間市場町』に拠点を置く仲介商人の卸売・小売機能、彼らによる物資の垂直的な集散流動に、より直接に関連している」とされたが、バヤーナなどの市場町も、この中間市場町か、場合によってはより上位の中心市場町としての性格を強く有していたといえるのである。

ところで、中国の郷紳とインドのザミーンダールの性格を同一とみなすことはできないが、当時のインドにあって郷紳的位置にあったのがザミーンダールではなかったかと考える。そして郡 (Pargana) は、部族的紐帯の強い地域では、その「未分裂の一部族の所持する領域」に比定しうることが示唆されている。^⑦そしてその支配部族の長とも言えるのがザミーンダールであった。バヤーナ地方では、複数のカースト (ジャティ) がザミーンダールを出している郡も多く部族的一体性は崩壊しつつあるとみうけられるが、以上からみて郡は単なる政府による行政区分ではなく、在地の何らかの政治

表2 バヤーナ圏 (Biānah Circle) (1595—1596年)

パルガナ (郡) Pargana	耕地面積 (A) Bighas, Biswas (20 Biswas=1 Bigha)	課税額 (B) Naqdi (Dāms) (40 D.=1 Rupee)	B/A	給与地 (ジャーギール) Suyurghāl (Dāms)	ザミーンダール Zamindār (又は Būmi)	騎兵 Sawār	歩兵 Piyāda
Oudehi	274,067	2,884,365	10.5	78,165	Rājput, Brāhman, その他	30	500
Biānah 及びその 周辺 (2 Mahals)	235,442	7,110,104	30.2	562,205	Ahir, Jāt	50	1,000
Bhusāwar	303,509-9	5,505,460	18.1	255,460	種々のカーストの Rājput	50	1,500
Todah Bhim	264,103-11	3,737,075	14.1	13,361	Rājput, Thatthar	100	1,000
Khānwah	105,334	2,912,495	27.7	222,628	Rājput, Jāt	100	1,000
Sonkar Sonkri	90,599	985,700	10.9	7,822	Rājput, Chauhān	70	500
Fatehpur	202,723-18	8,494,005	41.9	597,346	Shaikhzādah, Chishti, Rājput, Sankarwāl	500	4,000
Wazirpur	71,328	2,009,255	20.9	9,255	Rājput	20	300
Hindaun	432,930	9,049,831	28.2	301,980	Rājput, Brāhman, Jāt	100	1,000
Hilak	137,421	2,789,494	20.3	30,531	種々のカーストの Rājput	20	500
小 計	2,117,457-18	45,477,784	平均 21.5				
Ud	203,505	1,003,848	4.9	36,870	Shaikhzādah	100	500
Oī	153,377-9	5,509,477	35.9	81,542	Rājput, Brāhman	100	1,000
Banāwar	12,880	155,360	12.1	...	Bargujar	30	400
Bāri	276,964	5,064,158	18.3	57,414	Rājput, Panwār	300	7,000
Bijwārah	663,236	10,966,560	16.5	1,500	5,000
Bhaskar	43,009	2,891,100	67.2	15,325	Rājput, Brāhman, Ahir	20	700
Chausath	97,434	4,182,048	42.9	674,315	Rājput, Brāhman, Jāt, Ahir	50	1,000
Rāpri	477,201-11	13,508,035	28.3	173,407	Chauhān, Rāwat Bāhan の子孫	200	4,000
Rajhohar	318,285	1,694,203	5.3	48,023	Rājput	20	300
Mathurā	37,347	1,155,807	30.9	69,770
Maholi	66,690	1,501,246	22.5	...	Rājput	30	500
Mangotlah	74,974	1,148,075	15.3	79,355	Rājput	20	400
合 計	4,542,360-7	94,257,701	平均 20.8				

(出典) : Abū-l Fazl, *Ā'in-i Akbarī*, vol. I pp. 356, 442-444. tr. vol. II, pp. 103, 193-194.

的・社会的な一体性に基礎を持つ区分であったといえる。

以上の観点から表1と表2（ここでは徴税区 (Maha) についても言及されている。アーングラやバヤーナの場合二徴税区とされるなど、徴税区は必ずしも地理的区分を意味しないが、通常は地理的区分である郡と一致する）を対比させると、次のことがわかる。まず、すでに第一章でふれておいた如く、五市場圏の中心の市場町はいずれも各郡の中心のいわば郡庁所在地ともいべき町であるという点で、郡と市場圏との一定の対応関係がみられる。政治の中心と経済の中心とが一致しているのである。

しかし同時に、バヤーナ市場圏に所属するヘラク郡の中心であり、ナードバイもその位置からみて、おそらくバヤーナ郡に所属していなかったであろうし、バサーワル市場圏のうち、ソンケルとソンクリはソンケル・ソンクリ郡の中心であり、カーヌア市場圏のうちファテプルは同名を冠する郡の中心であり、ヒンダウン市場圏のうちワズマイルプルもまた同名を冠する郡の中心であった。また、フィンチによってバヤーナに匹敵する立派な町とされたウッチェンも、ジャドナート・サルカールの示唆するように Oudahi (即ちウッチェン) 郡の中心であった可能性が濃い。それらは地図1の郡の境界からも推測できるであろう。当時の郡名にはまだ比定し難いものが多く、以上の他にも市場町の所属する郡とは異なる郡に所属する村があったであろう。しかし、以上の検討だけでも、これらの市場圏は当時の郡とは必ずしも一致せず、むしろ二郡あるいは数郡にまたがるものが多かったことがわかる。すなわち、当時のアイの市場圏は郡の境域を越えて広がっていたのである。同時に、各郡の中には、(少なくともアイに関しては) その郡の中心地と同一の市場圏に属さない村々も当然多かった筈である。たとえば、アーングラからバヤーナをへてアフマダーバード、スーラトへ至る街道の南東側の村々の多くはアイを産しないため、生産・出荷面に関する限り、当然各アイ市場圏に所属してはいなかったのである。

なお、当時のアーングラ州の各郡の平均村数はおそらく百数十であったと推定でき、バヤーナ地方でもそれを大きく下ま^⑩わることはなかったと思われる。従って、ベルサールトの挙げる各市場圏の村名は各市場圏内に立地する全村名ではなく、

そのごく一部分にすぎず、特にアイ生産で知られた村名のみを挙げたものであることがわかる。

最後に、バヤーナ地方の商業用アイの作付面積と生産高が当該地方の諸郡の総耕地面積と総生産高に占める比重について、ごく大雑把な推定を行なっておきたい。

イギリス人やオランダ人による買付けのさかんだった時期のこの地方の商業用アイの総生産高を、主にベルサールトに依拠してモアランドは三、〇〇〇〜四、〇〇〇梱と推定し、ハビーブも四、〇〇〇梱としている^⑩。

先に示した数種のビーガ当り生産量の推定のうち、今度は作付面積推定が過少評価されることを恐れて、一九世紀ウツタル・プラデシ州のそれ——〇・二〇マン——を基準とすれば、四、〇〇〇梱のアイ染料を生産するためのアイの作付面積は八万ビーガとなる。他方、各アイ生産村の所属する郡は少なくとも表2中のオデヒ（ウツチェン）からヘラクまでの一〇郡とみることができ、それらの総耕地面積は二、一一七、四五八ビーガとなる。従って、先の八万ビーガはこの総耕地面積の約三・八パーセントとなる。

第二に、表2の基礎となっている『アーイーネ・アクバリー』の書かれた一六世紀末における同地方のアイ染料の価格が、同書に依れば一マン当り一〇〜一六ルピーであったことを基準とすれば、四、〇〇〇梱では一六〇、〇〇〇〜一九二、〇〇〇ルピーの総収入となる。ところで、当時の政府への地税額は普通農業総生産の三分の一ないし二分の一とされるが、仮に上限をとって二分の一とすれば、同時期の同地方の税額（四五、四七七、七八四ダーム。四〇ダーム＝ルピー）の二倍が総生産額となる。すると先述のアイ染料の総生産額は農業総生産額の七・〇％〜一一・三％となる。

以上により、商業用アイは作付面積においてアイ生産諸郡の総耕地面積の四％、アイ生産による収入は総生産額の一二％を上限としていたことになる。一六世紀末の時点におけるアイのビーガ当りの価格は、穀物類の三〜四倍であったので、^⑪アイによる収入の占める比率が、作付面積の占める比率より大きくなることは当然といえるであろう。

もちろん、以上の推定の根拠には例えば表1のビーガ当り税額が郡ごとに大きく異なっていることをはじめとする多く

の未確定な要素が存在し、これらの推定数値そのものには必ずしも大きな信頼度はおけないが、全体として過少評価のおそれは少ないといえるであろう。すなわち、以上から、バヤーナ地方の諸郡全体の農業生産の中でアイ生産の占める比率はやはり必ずしも大きくなくて、穀物類などの占める比率が大きかったと言えるであろう。

しかし、同時に、このアイ生産の占める低い比率は、表1に挙げられた町村数がこれらの郡内の全村数に対して占める比率の低さとも対応していると思われる。もちろん、表1の諸町村以外の村も先述の四、〇〇〇梱のアイの生産に寄与していたことが考えられるけれども、もし表1の諸町村に商業用のアイの生産が圧倒的に集中していたとすれば、それらの町村自体の農業におけるアイ生産の占める比重はやはりかなり重かったと言えるであろう。また、一七世紀を通じて農産物価格は全般的に上昇傾向にあったといわれているが、オランダやイギリスの本格的進出によるアイの買付け競争の中で、アイ価格の上昇傾向は他の農産物のそれより相対的に大きかったと思われる、その結果アイ生産による収入が全農業生産のそれに占める比重の増大をみたことも確実であろう。

なお、これらのアイ生産町村で、農民が穀物生産を犠牲にして、自家消費のための穀物を購入してまでアイ生産に集中していたのかどうかという点は明らかでない。おそらく商人やザミーンダールによる農業労働者を用いてのアイ生産の場合以外には、穀物の購入はあまりなかったのではないかと考える。^⑭本稿でみた市場圏も農村の生産物を都市へ運送するためのものであって、その下の段階の週市を媒介にしての農民相互間の商品交換の存在については本稿では明らかにすることができなかった。これらは今後の検討課題である。

① EF, 1655-60, p. 66.

② Pelsaert, pp. 15, 18, cf. EF, 1618-21, p. 196n; 1637-41, pp. 134-135; 1642-45, pp. 303-304; 1646-50, p. 140.

③ 他に例えば、一六二八年三月に、英東インド会社のアーダラ商館員たちが、「村人やバヤーナの商人たちへ前貸することを許可して欲し

ら」と上官へ訴えてくる (EF, 1624-29, p. 246)。また、一六四七年には、七月中旬まで一ヶ月近く一英商館員がバヤーナ地方に滞在してらたが、これを前貸ししたのびるべん (EF, 1646-50, p. 140)。

④ Pelsaert, pp. 16-17.

⑤ cf. Tavernier, I, pp. 72-73.

⑥ 松井透『北インド農産物価格の史的研究』I、一九七七年、八五一—一〇四頁参照。

⑦ G. W. Skinner, *Marketing and Social Structure in Rural China, The Journal of Asian Studies*, vol. 24, Nos. 1, 2, 3 (1964—66), No. 1, pp. 5-10. 今井清一、中村哲夫、原田良雄（記）『中国農村の市場・社会構造』一九七九年、七一—四頁。

⑧ 斯波義信の要約に依る（G・ウ・リアム・スキナー著、『中国農村社会における市場・社会構造』、『東洋学報』第四十九巻第二号、一九六六年、一〇四頁）。Skinner, *op. cit.*, pp. 17-43. 同訳書、二五一—六一頁参照。

⑨ Charles Elliot, *The Chronicles of Oonoo*, p. 149n. フジヤハ
Habib, *Agrarian System*, p. 162. ⑩ 引用に依った。Tibb, pp. 160-162. 参照せよ。

おわりに

本稿では、一七世紀北インドにおける代表的な商業的農業であるバヤーナ地方のアイ生産について、以下の諸点を明らかにした。即ち、その生産地帯が当時の大街道沿いであったため、内陸部にあったにもかかわらず、諸外国の商人をひきつけ発展させたこと。その生産過程において硬水の井戸水による灌漑を行なうなど、他の作物にはあまり適さない水の性質を逆に上手に利用していたこと。又、井戸水灌漑、除草作業、染料分の溶解した液の攪拌作業における共同労働、比較的大きな二基の水槽の使用など、かなり労働集約的であった程度程度の資本を必要とする側面があったこと。しかし、オランダ人、イギリス人らのアイの買付け競争の中で、生産者の中には富裕な者もあらわれ得たこと。アイ経営に従事した商人の中にはおそらく数百ヘクタールを作付けしていた者もあったと思われること。また同地方のアイ産業にはそれぞれ中

⑩ 一七世紀後半アウラングゼーブ時代の統計書によるアークラ州の村数は三〇、一八〇 (Habib, *Agrarian System*, p. 4). 他方、一六世紀末のアークラ州の村数は『アーイーネ・アタムリ』によれば二〇三。従って一郡当りの村数は一四九となる。但し、徴税区数は二五九とあり、一徴税区当り一六村となる (Faruqi, *Alburi*, vol. I, pp. 42-45, fr. vol. II, pp. 193-206)。一七世紀中の村数増加も考慮に入れなければならないが、以上により大体的概念は得られよう。

⑪ Moreland, *op. cit.*, p. 115; I. Habib, *op. cit.*, p. 43. Naqvi, *op. cit.*, pp. 55-57. 参照せよ。

⑫ 第三章注⑩参照。

⑬ Moreland, *op. cit.*, p. 118. *Faruqi-Alburi*, vol. I, p. 360.

⑭ フジヤハ Habib, *Potentialities*, pp. 20-21. 参照。

心に市場町を持つ五つの中間市場圏があり、それらの各々は郡の境域を越えるものであったが、それぞれの中心の市場町は郡の中心でもあったこと。またアイ生産がそれぞれの生産町村の経済に占める比率はかなり大きかったであろうが、それらの市場圏が所属する諸郡全体の経済に占める比率はあまり大きくなく、やはり穀物生産などの占める比率の方が大きかったであろうということなど。

以上に検討したバヤーナ地方のアイ生産も、一六四〇年代末頃から西インド諸島にアイ・プランテーションが発展し、イギリスやオランダ、さらにはヨーロッパ諸国による需要が減少していくと衰退の傾向を色濃く示すようになっていく。この時期には西アジア方面を経由してヨーロッパへ輸出されたアイの量も減少したようである。^①それ以前にも、重税のもつとで、アイ価格が二年つづきで暴落した後にはアイの作付が減少するなど、衰退傾向がみえていたように思われる。^②その後、この地域よりやや北の地方を中心にジャートのザミンダールによるムガル帝国に対抗しての領域拡大の動向が強まり、そして一八世紀中にはこの地域もジャートの王国たるパールラトプル王国の支配下にはいつていくことになる。^③パールラトプル王国のもつとでのこの地方の経済についての検討は今後の課題としたい。

① Moreland, *op. cit.*, pp. 112-114; Sarkar, *op. cit.*, pp. 174-176.

② 第三章注⑨参照。

③ このジャート王国は地図1のパールラトプルの北西二五キロのスイン

ス・ニのザミンダールの蜂起が直接の発端となって成立した (Ram Pande, *Bharatpur up-to 1826*, Jaipur, 1970, p. 5. 参照)。

付記

『センサス・アトラス』の閲覧に際し古賀成則氏の、『東部ラーシプターナ地誌』、二十五万分の一および十二万五千分の一地方図等の閲覧に際しては応地利明氏の御尽力を得た。また応地氏からはいくつかの貴重な御教示を頂いた。ここに記して感謝いたします。

(京都大学研修員)

The Historical Conditions of Enforcement of *Hyōsei* 評制

—*Kohori* 郡 in the So-Called Pre-*Taika* 大化Period—

Motokazu Kamata

It has been a widely held opinion that in the so-called pre-*Taika* period the local administrative system consisted of the two institutions: *Kuni* 国 dominated by *Kuni-no-miyatsuko* 国造 and *Agata* 県 by *Agata-nushi* 県主. But there is another opinion insisting that as early as the pre-*Taika* period another local administrative institution called *Kohori* developed to a certain degree.

The aim here is to consider *Kohori* in the pre-*Taika* period and to clarify the historical conditions of enforcement of *Hyōsei*, which was, as stated in my recent article, wholly done under the reign of Kōtoku 孝徳. To begin with, I make it clear that, using the fruits of the studies on the various texts of *Shoku-nihongi* 続日本紀, the word *Agata-no-inukai-no-muraji Ohotomo* 県犬養連大侶 in the article dated on July *Jinshin* 壬辰 in the 1st year of *Taiho* 大宝 was in fact the word *Kohori-no-inukai-no-muraji Ohotomo* 郡犬養連大侶; and that *Kohori*, the prefix of this word, presumably stemmed from an original text written before the 10th year of *Tenmu* 天武. It follows that there was the *Kohori-no-inukai* clan named after the post in the pre-*Taika* period, which would substantiate *Kohori*.

From this point of view, I argue not only the details and characters of *Kohori*, but the differences and resemblances between *Agata* and *Kohori*, referring to the *Naniwa-gun* 難波郡, a case in point.

Indigo Production and Circulation in North India

during the 17th Century

—A Study on that of the Bayāna Tract—

Hiromu Nagashima

Indian indigo had a very important role in the world history, being

much exported to Europe in the first half of the 17th century as a superior dye of woollen stuff. The existing studies, however, have had some lacunae in clarifying the conditions of its production and circulation.

In this paper, taking up the Bayāna tract where the best indigo was produced, I tried (1) to locate the indigo producing towns and villages on a map and to find out historical geographical reasons for this tract's acquiring a prominent position in indigo production of that time; (2) to enquire into the physical geographical conditions of its production and to compare its production process with that of the indigo plantations of the English planters in India in the 19th century; (3) to classify the types of its management; and (4) to analyze its market structure.

I emphasized the following points: the Bayāna tract was along one of the trunk roads of that time; the process of indigo production in that tract was more intensive and expensive than in any other indigo producing tracts of that time; even some sections of the peasants were able to become rich in indigo production; in the Bayānana tract there were five intermediate marketing areas, each of which had a respective intermediate market town; though each intermediate market town was the center of a pargana, the marketing area under that market town was wider than that pargana area; and even in the Bayāna tract (i. e., a group of the parganas which covered the five marketing areas), the total production of indigo seems to have been much less in both its sown area and the income from its cultivation than that of food grains as a whole.

The Lordship in the Wiltshire Manor of Adam de Stratton

by

Keizo Asaji

Adam de Stratton, one of the attorneys of Isabel de Fortibus, was granted the manor of Sevenhampton, Wiltshire, in 1273 and held it